

## 【論文】

『梅光言語文化研究』第7号（2016年）pp.1・18  
© 2016年 梅光学院大学国際言語文化学会

---

# 『英語談話標識用法辞典 43 の基本ディスコース・ マーカ―』をめぐって

—談話標識をどう記述するか—

松 尾 文 子

The purpose of this paper is to suggest how to describe the usage of English discourse markers in a dictionary, based on *A Dictionary of Discourse Markers in English (DDME)*. This dictionary is edited by Matsuo, Hirose and Nishikawa and has been published by Kenkyusha in October, 2015. The organization of this paper is as follows: the outline of *DDME* in section 2; the patterns of discourse markers in *DDME* in section 3. “The patterns” means the positions of discourse markers in an utterance in this case; the examples of the discourse marker *but* in *DDME* in section 4; some problems in describing the usage of discourse markers in section 5. Finally, I suggest how to describe the usage of discourse markers in a dictionary.

キーワード：英語談話標識、用法辞典、用法記述

## 1. はじめに

昨年（2015年）10月、小論の筆者を含む3名の編著で『英語談話標識用法辞典 43 の基本ディスコース・マーカ―』を科学研究費助成事業の補助金を受けて（株）研究社から出版した。我々の永年にわたる談話標識研究の一つの成果である。本論では、取上げた各談話標識の全体像や用法をどのように記述したか、および本辞典を編む作業を通して見えてきた問題点を述べ、辞典における談話標識の記述のあり方を提案する。

第2章では出版の経緯、刊行の目的と意義、本辞典の構成と用例に関して述べて本辞典の概要を示す。第3章では、本辞典で採用した各項目の形式の表示を記す。第4章では、*but* を例に記述の具体例を示す。第5章では、談話標識記述の問題点をいくつかの観点から述べる。最後に第6章では、辞典における談話標識の記述のあり方を提案する。

## 2. 本辞典の概要

### 2.1. 出版の経緯

2006年6月、恩師の小西友七先生から筆者に「接続語句とレキシカルフレーズを談話文法の観点を取り入れて一冊にまとめないか」という旨のハガキが届いた。それがきっかけで本辞典が誕生することになった。突然のことで戸惑いながらも自分なりに構想を書いて返信し、同年8月末に最後のハガキが届くまで合計6通のやり取りをした。それから間もなく、9月10日に先生は永遠の眠りにつかれた。先生が当初提案された執筆メンバーから紆余曲折を経て最終的には、談話標識というテーマに共通の興味を抱き続けている3名（廣瀬浩三氏（島根大学）、西川眞由美氏（摂南大学）と筆者）による共著となった。全体の取りまとめ役は筆者が務めたが、3名が協力して作り上げていった。企画立ちあげ時から9年あまり、研究社には辛抱強くお付き合いいただき、数々の有益なアドバイスをいただいた。そして、平成27年度の科学研究費助成事業（科学研究費補助金・研究成果公開促進費・学術図書）〔課題番号15HP5063・申請代表者 松尾文子〕に採択され、出版の運びとなった。

小西先生が思い描かれた内容になったかどうかは分からない。しかし、現在では言語学の分野で魅力的で大きな研究テーマとなった談話標識を、実例を重んじて実証的に記述した内容にできたと考える。

### 2.2. 刊行の目的と意義

英語の談話標識をめぐる従来の理論を踏まえながらも、特定の理論や枠組みにとらわれず、実証的な手法を重視して英語の談話標識個々の用法を詳細に記述する。それによって、英語学の研究のみならず英語教育にも寄与することを目的とする。特に、英語を教える者や学ぶ者にとっては有益な辞典である。

これまでに、談話標識の個別研究や特定の理論や枠組みによる記述や分類は行われてきたが、本辞典のように約100項目におよぶ談話標識を膨大な実例に基づき実証的な手法で詳述したものは、筆者の知る限り存在しない。昨今の英語教育ではコミュニケーションや英語による発信が重視されている。談話標識はすぐれてコミュニケーション的・談話的な要素であり、かつ非母語話者にとって学習や習得が困難である。したがって、本書が貴重な情報源になると確信する。さらに、後述のようにAppendixにおいて、従来の理論や研究をまとめた上で談話標識の考え方を提示しているので、本辞典に学術的な価値も見出せる。

### 2.3. 本辞典の構成

英語の非母語話者の立場からすると、外国語である英語を理解する際に文や発話の内容の理解は重要であるが、コミュニケーションの観点からすると、文字通りの意味より話し手（書き手）の発話意図を正しく理解することがより重要である。しかしながら、それには学習者として大きな困難を伴う。談話標識は、話し手（書き手）が自分の発話意図を明確にするための言語的合図として機能し、実践的なコミュニケーションの場においても極めて重要である。このような発話意図を示すさまざまな言語表現を広く談話標識というカテゴリーにまとめて、従来の研究の知見を活かしつつ、多くの実例を分析して個別に実証的な記述を行い、新たな知見を盛り込んで体系的に記述している。

本書の構成は以下の通りである。

#### 《まえがき》

本書の概要と、出版に至る経緯を述べる。

#### 《談話標識の用法記述》

ここが、本書の中心となる部分である。主だった談話標識を大まかに形態から分類して個別記述を行う。各見出し項目の中には、関連表現も含める。具体的には、「概説」と「マッピング」で当該項目の全体像を把握する。「概説」では、談話標識へと展開する過程、各用法の概要、言語使用域等を述べる。「マッピング」は、当該項目にどのような用法があるか、解説で何が述べられているかが一目で分かるいわばナビのような形になっている。「各用法の解説」では、当該項目を文（発話）中での位置と意味機能によって分類し、「解説」で用法を詳細に記す。場合によっては、関連表現を準見出し項目として立てる。最後に「関連事項」では、関連表現、共起する談話標識、日英語比較等、各項目の特質に応じた事柄を述べる。

取上げた項目は以下の通りである。（ ）内は関連表現として準見出し語で収録されている。

1. 副詞的表現: actually, anyway, besides, first(ly) [last(ly)], however (nevertheless, nonetheless, still), kind [sort] of, like, now, please, then, though, whatever
2. 前置詞句表現: according to, after all, at last, at least, by the way, in fact, in other words, of course, on the other hand (on [to] the contrary)
3. 接続詞的表現: and, but (yet), plus, so

4. 間投詞的表現 : ah, huh, look, oh, okay, say, uh, well, why, yes / no
5. レキシカルフレイズ : I mean, if anything, if you don't mind, if you like, mind (you), you know, you know what?, you see

収録項目については、候補となる表現をあげていったうえで数を絞ることにした。当初候補となった表現は130にのぼり、as, because, since, or といった接続詞、apparently, frankly, indeed, otherwise, really といった副詞、above all, on the whole などの前置詞句、I think, let me see などのレキシカルフレイズが含まれていた。それらを見出し項目とするもの、関連表現として見出し項目の記述の中に入れ込むものに分類した。その後、原稿の進み具合や談話標識としての記述の難易度を考慮して扱う項目を絞り込み、最終的には見出し項目と準見出し項目で49項目、関連表現を含めると約100項目となった。当初候補にしたのが130項目であることからすると、数の面では約30項目しか減っていない。しかし実際は、原稿を書き進めるうちに関連表現に含めたものが多数あり、当初候補とした項目を相当数削ることになった。本来ならば収録したかった項目については、後述する。

#### 《Appendix I》

「談話標識の用法記述」が個々の表現を取上げた実践的な内容であるのに対して、ここでは談話標識の全体像を分かりやすくするために、専門的な見解も紹介しながら以下のトピックを取りあげる。

#### 〈Appendix A〉 談話標識研究の歩み

談話標識と称される一連の言語表現が、言語研究の中でどのように扱われてきたのか、それぞれのアプローチを整理し、テキスト分析的アプローチ、会話分析的アプローチ、コーパス言語学的アプローチ、語用論的アプローチ、関連性理論のアプローチ、Fraserのアプローチ、歴史語用論と文法化・(間)主観化に関わるアプローチを網羅する。

#### 〈Appendix B〉 談話標識についての基本的な考え方

プロトタイプ的な文法カテゴリーとしての捉え方、談話標識の一般的特徴、談話標識の意味、談話標識の機能的特徴、談話標識とは何かについて論じる。

#### 〈Appendix C〉 談話標識の機能的分類

談話標識の機能を、談話構成機能、情報授受・交換機能、態度・感情表明機能、対人関係調整機能に分類し、それぞれ例をあげながら詳述する。

## 《Appendix II》

談話標識研究の将来展望について述べる。

Appendix についても説明を要する。最初の段階では、談話標識個々の用法記述のみを行う予定であった。しかし、内容を膨らませてこれまで出版されていない談話標識研究の集大成となる研究書にしようということになり、『英語談話標識の諸相』の仮題で2012年の段階では以下の構成を考えて執筆を進めていた。

### I . 総論：談話標識を学術的に論じる。

- 1.1 談話標識研究の変遷
- 1.2 談話標識と関連性理論
- 1.3 談話標識の一般的特徴
- 1.4 談話標識の分析の観点
- 1.5 談話標識研究の方向性

### II . 各論 Part 1 ―機能的に見た談話標識―：機能別観点から論文形式にする。

- 2.1 対比・逆接を表す談話標識
- 2.2 理由・結果を表す談話標識
- 2.3 談話の展開を合図する談話標識
- 2.4 談話の展開を促す談話標識
- 2.5 談話修正を合図する談話標識
- 2.6 新旧の情報・知識の授受を合図する談話標識
- 2.7 感情表出に関わる談話標識
- 2.8 対人関係調整に関わる談話標識

### III . 各論 Part 2 ―個別的に見た談話標識―：主だった談話標識を個別記述する。

- 3.1 副詞表現
- 3.2 前置詞句表現
- 3.3 接続詞的表現

### 3.4 間投詞表現

### 3.5 レキシカルフレイズ

しかし、ページ数が増えて価格が高くなる、専門性が高過ぎると読者層が限られるといった出版事情や、時間的な制約があった。その一方で、談話標識の用法記述という実践的な成果だけではなく学術的な成果も取り入れて、英語学の研究者のみならず、英語教師や英語学習者が広く活用できる書物にしたいという執筆者の願いを出版元である研究社が理解してくださり、現在の形となった。

2012年バージョンの「Ⅰ．総論」は縮小・改変して、Appendix IのA、BとAppendix IIに入れた。「Ⅱ．各論 Part 1」は論文形式をやめて大きく形を変えて、Appendix IのCに移行した。「Ⅲ．各論 Part 2」は、若干の改変を施して「談話標識の用法記述」とした。

なお、2012年バージョンの「Ⅰ．総論」は、本書の基盤となる論考として内容を充実させて、松尾・廣瀬（2014）「英語談話標識の諸相（1）—英語談話標識研究の変遷」、および松尾・廣瀬（2015）「英語談話標識の諸相（2）—談話標識についての基本的な考え方と分析の観点」に掲載している。

#### 《引用作品》

本書の用例の引用元を示す。用例は、小説・エッセイ等、映画台本、新聞・雑誌類、インターネットウェブサイトから収集した。原則として1970年以降の作品を対象としているが、2000年以降のものも多数含まれており、映画台本は一作品を除いて1990年以降のものである。

#### 《参考文献》

#### 《索引》

以上で総頁数は377となる。

## 2.4. 用例

用例の引用元は先述の通りである。談話標識は先行の発話や後続の発話、発話の状況なども考慮して解釈する必要があり、当該の談話標識が含まれる発話のみで用法や機能を記述できない。したがって、一般の英和辞典や和英辞典などよりも用例が長くなる場合が多

い。当該の発話をめぐる情報、たとえば話し手と聞き手に関する事柄、どのような状況で発話しているのかなどをカッコ付きで補っている。

用例には日本語訳をつけているが、後述する訳語の問題がある。かなりの苦労を要したが、談話標識で表される話し手の意図が分かりやすい訳語をつけることに注意を払った。

### 3. 各項目の形式の表示

本辞典では、当該項目を文（発話）中での位置と意味機能によって分類する。談話標識は単一の統語範疇（品詞）ではなく、意味機能や特徴も多岐にわたる。さらに、談話標識の用法は特に先行文脈や発話状況との関連において捉えなければならない。したがって全項目に統一的な形式表示を取り難いことから、各項目の特性に応じた形式表示を採用する。必要に応じて、「ターンの冒頭 [途中]」という表示を用いる。「ターン」とは簡単に言うと、ある話し手が一回の発話の順番で発話するいくつかの文（発話）から構成された単位である。もちろん、単一の文（発話）で1つのターンが構成されることもあるし、話し言葉であるから不完全な形の文（発話）を含むこともある。

採用した形式表示は以下の通りである。

#### ①語修飾の場合

- (i) 《語修飾》 *like* (,) A
- (ii) 《語修飾》 A, *if you like*.

#### ②文修飾の場合

- (i) 《文頭》 *Actually* (,) S V (O).
- (ii) 《文中》 S, *ah*, V (O).
- (iii) 《文尾》 S V (O) (,) *anyway*.
- (iv) 《文頭・文中・文尾》 *However* (,) S V (O), etc.
- (v) 《文頭》 ターンの冒頭 *Ah* (,) S V (O). (一連の発話の冒頭で用いる場合)
- (vi) 《文頭》 ターンの冒頭 A : 先行発話 B : *Then* (,) S V (O). (先行発話などからの情報を受けて用いる場合)
- (vii) 《文尾》 ターンの冒頭 A : 先行発話 B : S V (O) (,) *then*. (先行発話などからの情報を受けて用いる場合)
- (viii) 《文頭》 ターンの途中 *Ah* (,) S V (O). (一連の発話の途中の文頭で用いる場合)
- (ix) 《文頭・文中》 ターンの途中 *Look* (,) S V (O), etc. (一連の発話の途中の文頭・

文中で用いる場合)

(x) 《文中》ターンの途中 S, *uh*, V (O). (一連の発話の途中の文中で用いる場合)

### ③独立的な場合

(i) 《単独》A: 相手の発話 B: *If you like*.

(ii) 《単独》ターンの冒頭 *Whatever*.

場合によっては、上記の形式を少し変えた箇所もある。たとえば、典型的に疑問文で用いられるような場合は、‘V S (O) (,) *anyway?*’ のように表示したり、動詞として典型的に *be* 動詞が用いられる場合は、V を *be* としている。

形式表示のタイプの多さからも、談話標識はさまざまな用いられ方をすることが分かり、そのことが談話標識の多種多様性と記述の統一の困難さを示している。

## 4. 記述の具体例：but を例に

ここでは、*but* を例に「マッピング」と3つの用法の中の用法1の記述を記す。なお、紙面の都合上レイアウトはオリジナルの辞典とは異なる。

### 4.1. マッピング

「マッピング」の目的は、当該の項目の全体像を捉えやすくすることと、数ある「解説」(*but* の場合は関連表現の *yet* と合わせて 20) の中で特に重要な事柄がどこに書かれているかを示すことである。いわば当該の項目のナビの機能を持つ。

用法1 [文頭] しかし (予想・期待に反すること) 2 [ターンの冒頭・文頭] でも (先行発話を受けて、反論・疑念等の感情) 3 [ターンの途中・文頭] さて、ところで (話題の転換) <i>but</i> の後のコンマ ⇒ 解説 1 文尾の <i>but</i> ⇒ 解説 2 発話行為との関係 ⇒ 解説 4 発話の状況を受ける ⇒ 解説 5 疑問文・感嘆文での使用 ⇒ 解説 13 共起する他の談話標識 ⇒ 解説 7、8、9、16、20 関連語 <i>yet</i> : それにもかかわらず (予想・期待に反すること)
--



- 関連事項① 垣根言葉 + but の表現
- ② 関連表現 but, however, nevertheless
  - ③ 日英語比較 but と「しかし」

「用法」では、文頭、ターンの途中などどのような言語環境で用いられるかを示す。次に代表的な訳語を1～2語あげて、カッコ内に機能を簡潔に記す。さらに、特に注意すべき事柄とそれが述べられている解説の番号を示す。ここで取り上げる事柄を収録した全項目を通して見ると、談話標識の特徴や談話標識を分析するにあたっての観点が分かる。続いて、準見出し語となる項目がある場合には、「関連語」としてあげる。but の場合は yet がそれに当たる。最後に、「関連事項」は当該の表現の特質によって立てる項目は異なるが、関連表現との比較や日英語比較などを扱う。特に、関連表現との比較は、英語で発信することや英語表現を読み込むこと、さらに非母語話者として理解し難い類義表現の使い分けを知るのに有効である。

#### 4.2. 用法1

##### 【用法1】

形式：《文頭》 *But* S V (O).

意味：(予想・期待に反して) しかし [だが、でも、けれど] S が (O を) V する。

解説：先行部分で述べられる内容や結果から推論すると、予想外のことや矛盾する内容を述べる際に用いられる。

##### 【用例】

“I need to talk to Harry. *But* he’s out of town.” —Grisham, *Client* 「ハリーと話さなければ。でも、町を離れてるわ」(発話の前提条件の否定) / “Do you want to drive by her house tonight?” “Yes. *But* I don’t have a car yet,” I said.—Cornwell, *Body* 「今夜車で彼女の家のそばに行ってみたい?」「ええ。でも、まだ車の準備が出来ていないわ」と私は答えた(発話の前提条件の否定) / “May I have two tickets?” asked Harry. “Yes, sir,” said the young officer. “*But* you’ll have to buy them from the booking office on the quayside.” —Archer, *Hiccup* 「(船の)切符を2枚買えるかね?」とヘンリーは尋ねた。「ええ。でも、波止場の予約窓口でご購入いただかなくてはなりません」と若い船員が答えた(先行疑問文の前提条件の否定)。

用法は、形式、意味、解説に分けて概要を記す。「意味」では通例、複数の訳語をあげてカッコ内に当該の表現のニュアンスを分かりやすくする情報を補足する。「解説」では、当該の表現がどのような状況や条件で用いられるかを示す。

用例をあげる順序は、辞書や語法書等からの例がある場合はまずそれを、次に小説や映画台本等から実際に収集した例となる。この実例が本書の最大の特徴である談話標識の「実証的な記述」の根幹を成す部分である。日本語訳の後に、必要な場合は（ ）内で機能をより詳しく説明し、ここにはないが他の談話標識と共起している場合は〔 〕内に共起情報を入れる。共起情報に関して、別項目の *actually* の記述から例をあげる。

“Do you mind if I smoke?” “Well, *actually*, I’d rather you didn’t” —*CALD* 「タバコを吸ってもいいですか」「あ、う、実は吸わないでもらいたいんですが」〔*well* との共起に注意〕（丁寧な断り）

この用例では、*actually* は聞き手にとって予想外の、多くは好ましくないことを伝える場合の前置きとして用いられて一種の丁寧表現となっている。ためらいを表す談話標識 *well* と共起することで、言いにくいことを穏やかに伝える話し手の意図がうかがえることに注意を喚起する。一般の英和辞典ではここまで細かい説明をすることは難しいが、談話標識は話し手の意図を合図する言語表現であり、それが最も重要な機能であるのでカッコ内にこのような情報を入れることは有益である。日本語訳の前や途中には、必要な場合は用例の理解を助けるために、実際に言葉となって表れていない情報を付け足す。次の *so* の用例では、発話が行われた状況を示している。

MARISA : Okay. Oh, cool. I won’t get dirty. Oh, Lord! I almost sat on your face. Right there. CHRIS : *So*, um, Ty seems like a terrific kid.—*Maid* [映]（公園のベンチに雑誌を置いて座ろうとするが、表紙にはクリスの写真が載っている場面）マリサ：さてと。これでとってもいいわ。汚れたくないもの。まあ、何てこと！もう少しであなたの顔の上に座るところだったわ。ちょうどこの所に。クリス：ところで、えー、（君の息子の）タイはいい子のようなだね〔*um* との共起に注意〕。

上述したことから分かるように、談話標識が用いられる場面や状況の記述は談話標識の理解に欠かすことができない情報である。

## 5. 談話標識記述の問題点

### 5.1. 談話標識にどのような表現を含めるか

談話標識は単一の品詞範疇に収まらず、副詞、前置詞句、接続詞、間投詞 (say や look のような動詞由来のもの、okay や right のような形容詞由来のものも含む)、レキシカルフレーズ (I mean のような‘主語＋動詞’型、if you like のような節など) と多種多様である。

本書で扱わなかった、あるいは詳細に扱えなかったものの中には、名詞から派生した correction や period もある。correction は「訂正、いや違う」の意で訂正・修正機能を持ち、period は「これでおしまい、以上」の意で発話の完結を表す機能を持つ (松尾・廣瀬 2015 : 2-3, 6-7)。また、本辞典の Appendix I の C にある態度・感情表明機能を持つ談話標識は、下位区分の感情表出機能を持つもの以外は種々の事情でほとんど扱えなかったが、重要な項目が含まれている。この態度・感情表明機能を持つ談話標識は、話し手がこれからどのようなスタンス (態度・感情・様式・確信度・明白性) で発話するかを合図し、いわゆる文副詞と称されるものが大半を占める。具体的には、評価明示機能を持つ amazingly, (un) fortunately など、発話様式表示機能を持つ frankly, honestly, seriously など、確信・明白性明示機能を持つ certainly, obviously, perhaps などである。frankly と honestly については、松尾・廣瀬 (2015 : 6-7) を参照されたい。

また、談話標識の機能別分類に関しては、本書の Appendix I の C や Fraser (1996, 2009) を参照されたい。Fraser は談話標識の具体例を網羅的に並べていて参考になるが、彼は語用論標識 (pragmatic marker) の呼称で本書で扱う談話標識よりもっと広い範囲で考えている。Fraser の分類に関しては、松尾・廣瀬 (2014 : 19-23) を参照されたい。

### 5.2. 記述の統一と一貫性の保持の難しさ

談話標識は単一の統語範疇 (品詞) ではなく、意味機能や特徴も多岐にわたり、その多種多様性が大きな特徴となる。したがって、各項目を一律に記述することは困難である。

また、談話標識の用法は実際の使用場面、たとえば先行発話や発話の状況と関連付けて示さなければならないし、話し手がどのような意図で当該の談話標識を用いているかを明示する必要があるので、説明の部分が多くなる。その結果、全編を通して用語や言葉づかいを統一するのが困難になる。たとえば、本辞典では hedge をおおむね「垣根言葉」と記しているが、説明をする際の文の流れから、「ためらい語」や「熟慮を表す語」と表記している場合もある。

理論言語学では、理論に基づいて記述の一貫性が求められる。一方、談話標識の場合は

多種多様性という特質上、特定の理論に則った記述が困難である。さらに、本辞典のように実例に基づいて実証的に用法を記述しようとした場合、個々の表現を取上げた語法研究的な色彩が濃くなり、結果的に談話標識全般を通した一貫性のある記述がし難い。

### 5.3. 用例

まず、用例の長さに関する問題がある。談話標識の特徴上、当該の項目が用いられている文脈や状況がある程度分かりやすく示す必要があり、用例が長くなりがちである。できる限り短く、かつ当該の項目の特徴が分かる用例を選び、文脈等の情報をカッコ付きで補足するようにはしているが、紙幅や販売価格とのバランスを取るのに骨が折れる。

談話標識の実態をより正確に写し出すには、各種コーパスや母語話者の活用によって、用例の情報源にバラエティを持たせる必要がある。

用例の解釈や日本語訳の問題もある。当該の発話をめぐる状況や話し手の意図を含めて、談話標識の解釈には多少なりとも個人差が生じる。文脈の読み取りには読解的な要素が絡み、記述者の主観的な解釈になりがちである。文脈の解釈が異なれば、談話標識の機能の解釈も違ってくる可能性がある。さらに、話し言葉から用例を引くことが多いので、当該の発話の話し手にどのような言葉づかいをさせるかの選択にも個人差が生じる。たとえば、日本語に特徴的な文末表現に関して、「～だ」「～さ」「～です」「～だわ」「～なの」など、どの表現を採用するかなどである。これらの表現は、話し手の性別、年齢や職業、話し手と聞き手の関係などによって異なるが、訳者がそこをどう捉えるかで訳語の違いが生じる。

### 5.4. 音調

談話標識の意味機能と音調には密接なつながりがある場合が見られる。単独で用いられる *well* を例に見る。

(1) a. [someone has just left the room after losing their temper]

*Well*. [intonation fall]

b. A: Have you done the essay?

B: *Well*. [intonation rise] —Blakemore 2002: 132

(1a) では下降調で、「おやまあ」と驚きやあきらめといった感情が伝えられる。(1b) では上昇調で、「ええと、そのう」とだけ述べて、これ以上言いたくない、あるいははっきりとした応答を避けていることが表される。

(2) a. *Well*…? [Rise intonation]

Interrogative: “What do you want? What have you got to say?”

b. *Well*… [Rise-fall-rise intonation] Indecision: “I’m not sure. Maybe!”

c. *Well*… [Rise-fall intonation]

Concession, often reluctant: “You may be right, but…” —Ball 1986: 117-18

(2a) のように上昇調で発話されると、「どうしたいの？」と通例相手に情報を求める。(2b) のように上昇―下降―上昇調では、「確かではないが、たぶん」と断言することに対する自信のなさが表される。(2c) の上昇―下降調では、「そうかもしれないが」と譲歩や不本意さ、ためらいのニュアンスを伴う。

また、Brinton (1996: 33)、Aijmer (2013: 28)、Schiffrin (1987: 328) で述べられているように、談話標識には音韻的な弱化という特徴を持つものもあるので、非母語話者にとっては微妙な音調を聞きとることが極めて困難である。さらに、聞きとれたとしても、発音の仕方にもともと個人差がある可能性がある。

しかしながら、談話標識の使用や解釈には音調的な要因は重要であるから、これをどのように表記するかを考える余地がある。

### 5.5. 社会言語学的な視点 および 談話のタイプ

松尾・廣瀬 (2014: 14; 2015: 8-9) でも述べたように、談話標識の用法を考える際には、単に書き言葉と話し言葉の区別やくだけた言い方と堅い言い方の区別をするだけでなく、話し手の性別、年齢、職業や社会的地位、地域差などの社会言語学的な視点も必要である。

小説からの引用であれ、映画シナリオからの引用であれ、本辞典の用例の大部分は会話から引いたものである。Aijmer (2013) では言語変種的語用論 (variational pragmatics) の立場から談話標識を分析しているが、会話でも公の会話、私的な会話、対面の会話、電話の会話によって、談話標識の用いられ方が異なることを述べている。その他にも、活動 (activity) や場面、たとえば授業、診察の場面、法廷、スポーツ中継などによって、談話標識の用いられ方に特徴が見られるとする。このように、場面によって談話標識の用法にどのような特徴があるかも視野に入れることが望ましい。これらのことを考慮すると、5.3. でも述べたようにさまざまなタイプの談話から用例を集めることが必要である。

## 6. おわりに：談話標識記述のあり方

ここでは本論のしめくくりとして、談話標識の記述のあり方を辞典類に絞って考える。

### 6.1. 機能レベルの記述の充実と類義表現の比較

辞典の Appendix I の C では、談話標識の機能として以下の4つのタイプを提示している。詳細は当辞典を参照されたい。

- ① 談話構成機能：談話の組み立てや展開を示す。
- ② 情報授受・交換機能：話し手が情報を受け取ったことや、新旧いずれの情報を伝達しようとしているか、情報を聞き手と共有したいかなどを合図する。
- ③ 態度・感情表明機能：話し手がこれからどのようなスタンス（態度・感情・様式・確信度・明白性）で陳述するのかを合図する。
- ④ 対人関係調整機能：会話を円滑に進めるために、話し手と聞き手の人間関係を調整する。

このうち、①は話し言葉であれ、書き言葉であれ、まとまった量の英文を読むときや、英語のスピーチやパラグラフライティングなど英語で文章を作る際に役立つ。④はコミュニケーションの観点に立つと、会話で役立つ。

また、非母語話者にとっては使い分けが難しい似た機能を持つ類義表現の相違も見えてくる可能性がある (cf. 松尾・廣瀬 2015: 33-34)。類義表現である *but* と *however*、*so* と *then* を例にあげる。

(3) A: Where did he go?

B: *But* / *\*However*, why do you want to know?—Fraser 2006: 82

(4) [speaker, who is in shock, has been given a whisky]

*But* / *°However* / *°Nevertheless*, I don't drink.—Blakemore 2002: 116

(5) a. It's more expensive to travel on Friday, *so* I'll leave on Thursday.

b. It's more expensive to travel on Friday. *\*Then* I'll leave on Thursday.

c. "It's more expensive to travel on Friday." "*Then* / *So* I'll leave on Thursday."

—Swan 2005: 529

「でも、しかし」の意味を表す *but* と *however* については、日本語では「でも、どうして

知りたいの?」「しかし、何故知りたいんだい?」と言えるが、(3)のように質問に対する応答では *however* は用いられない。*but* と *however, nevertheless* を比較すると、(4)のように *but* は実際に発された発話のみならず発話の状況を受けて用いることも可能であるが、*however* と *nevertheless* は容認度が下がる。日本語でも、「でも、ぼくは飲まないから」は容認可能であるが、「しかしながら / それにもかかわらず、ぼくは飲みませんから」はかなり不自然である。このあたりは、当該の項目が先行文脈として実際に行われた発話を必要とするのか、あるいは発話の状況を受けても用いられるのか、先行文脈との明らかな論理的関係の成立が必要とされるのかと関わりがあると思われる。また *so* と *then* に関しては、同一話者の発話内で自分の発言を根拠に推論結果を述べる場合に (5a, b) のように、*so* は可能だが *then* は用いられない。一方、(5c) のように、先行部と後続部の話し手が異なれば両語とも用いることができる。本辞典では関連事項の欄で類義表現の解説や比較を行ったが、機能レベルで項目横断的に記述した方がより体系的で、読者にとっても理解しやすくなる。

Appendix I の C 「談話標識の機能的分類」から、上記の項目以外にどのような比較が可能であるか、例をいくつかあげる。まず、談話構成機能の中では、付加的機能を持つ *and, besides, moreover*、談話開始機能を持つ *look, now, okay, so*、話題転換機能を持つ *now, anyway, by the way*、談話締めくくり機能を持つ *anyway, okay, so* などを比較できる。情報授受・交換機能の中では、情報受容機能を持つ *ah, oh, yes* などを、態度・感情表明機能の中では、感情表出機能を持つ *ah, huh, look, oh, well* などを比較できる。

談話標識は品詞範疇ではなく機能範疇であるから、個々の項目別記述と機能別記述が補完的であることを提案する。松尾・廣瀬 (2015: 37) で述べたように、談話標識の研究の方向性としては、大きく2つ考えられる。個別の談話標識に焦点を当てて徹底的な記述を目指す方向性と、1つの共通する機能から複数の談話標識を見渡して、それぞれが果たす役割の相違に注意を払いながら体系化を図っていく方向性である。本辞典は前者に当たるが、今後は後者のタイプの辞典の出版も望まれる。そのうえで、両者を併用することで補完的に活用するのも一案である。

## 6.2. 使用場面、使用域、スピーチレベルの提示

従来よく見られる、また本辞典でも採用した書き言葉、話し言葉、くだけた言い方、堅い言い方などのラベル付けだけでは不十分で、5.5. で述べたような社会言語学的な視点からのラベル付けを含めた広い意味でのスピーチレベルや、用いられる談話のタイプの提示も必要である。これに関しては、各項目で個別で解説すると同時に、機能別記述の中に別

コラムを設けて項目横断的に提示すると分かりやすいと考える。

### 6.3. 日英語比較の充実

松尾（2015）で述べたように、談話標識の意味や機能はその項目が用いられる場面と強いつながりがあり、談話標識の多くは、語彙的（辞書的）意味が安定せず、文脈に左右される。また、談話標識で伝えられる話し手の意図を解釈するには、発話の命題内容のみならず、発話時の話し手の発話態度や発話内容に対するスタンス、発話に伴うイントネーションなども関わってくる。このような特徴を持つ談話標識を日本語に訳すのは、非常に困難である。

一方で、日本語の談話標識の研究も盛んになっているので、英語学と日本語学の分野が手を結ぶことで、一定の成果が得られるであろう。談話標識ではなく接続語と称される場合もあるが、日本語の談話標識を扱った文献で主に2000年以降のものには、萩原（2012）、長谷川（2000）、堀池 & プラシャント（2009）、伊豆原（2004, 2005）、川越（2000）、権（2004）、松岡 & ノッター（2004）、Onodera（1995, 2004, 2007）、劉（2006）、武内（2015）などがある。

### 6.4. 発信の観点から

6.1. で述べた機能レベルの記述は、発信の場面で応用可能である。たとえば、会話においては対人関係調整機能が重要である。また、話し言葉ではスピーチ、書き言葉ではエッセイや論文などでは、談話の展開や構成、論理関係の明示が必要で、これには談話構成機能に関わる。発信型辞典としての役割を備えた辞典は、英語学習者に必要である。

以上、『英語談話標識用法辞典 43 の基本ディスコース・マーカー』の執筆の過程で気付いた問題点や課題と、辞典類における談話標識の記述のあり方を述べた。英語の談話標識をこれだけ詳細に扱った辞典は、筆者の知る範囲では存在しない。本辞典が先駆けとなって、より充実した、多くの読者に広く使ってもらえる辞典が生まれることを願う。今後は、個別の談話標識の用法研究をいっそう進めて、その成果を機能別記述に反映させ、同時に、機能別記述の成果を個別の用法記述に反映させたい。

\* 本論を執筆するにあたり、特に談話標識記述の問題点に関して、本辞典の共編著者である廣瀬浩三氏に有益なコメントをいただいた。心から感謝する。また、本辞典の出版まで長期間に渡って誠実かつ辛抱強くお付き合いくださった研究社の関係者の皆さま



まにも心から感謝の意を表す。

#### 参考文献

- Aijmer, K. 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Ball, W. J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. London: Macmillan.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brinton, L. J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Fraser, B. 1996. 'Pragmatic markers.' *Pragmatics* 6 (2), 167-190.
- ―. 2006. 'On the universality of discourse markers.' In K. Aijmer and A.-M. Simon-Vandenberg (eds.), *Pragmatic Markers in Contrast*. Studies in Pragmatics Series 2. Amsterdam: Elsevier. 73-92.
- ―. 2009. 'Topic Orientation Markers.' *Journal of Pragmatics* 41, 892-898.
- 萩原孝恵. 2012. 『「だから」の語用論：テキスト構成的機能から対人関係機能へ』東京：ココ出版.
- 長谷川哲子. 2000. 「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』105, 21-30. 日本語教育学会.
- 堀池薫, プラシヤント・パルデシ. 2009. 『言語のタイポロジー―認知類型論のアプローチ』東京：研究社.
- 伊豆原英子. 2004. 「添加の接続詞「それに、そのうえ、しかも」の意味分析」『愛知学院大学教養部紀要』52.1, 1-17. 愛知学院大学教養部.
- ―. 2005. 「選択の接続詞「それとも、または、あるいは」の意味分析」『愛知学院大学教養部紀要』52.3, 69-82. 愛知学院大学教養部.
- 川越菜穂子. 2000. 「「話題転換」をあらわす接続表現について―「ところで」と「とにかく」―」『人間文化学部研究年報』130-142. 帝塚山学院大学.
- 権景姫. 2004. 「接続詞『実は』―転換の機能を中心に―」『韓国日本學報』61.1, 1-16. 韓国日本會.
- 松尾文子. 2015. 「英語の談話標識の日本語訳 および 呼びかけ語との共起」『英語表現研究』31・32 合併号, 61-72. 日本英語表現学会.
- 松尾文子, 廣瀬浩三. 2014. 「英語談話標識の諸相 (1) ―英語談話標識研究の変遷―」『梅

- 光言語文化研究』5, 1-38. 梅光学院大学国際言語文化学会.
- 一. 2015. 「英語談話標識の諸相 (2) —談話標識についての基本的考え方と分析の観点—」  
『梅光言語文化研究』6, 1-51. 梅光学院大学国際言語文化学会.
- 松岡和美, ノッター・デビッド. 2004. 「根拠と結果を示す接続表現の日英語比較: After all は「結局」か?」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』44, 95-112. 日吉紀要刊行委員会.
- Onodera, N. 1995. 'Diachronic Analysis of Japanese Discourse Markers.' In A. H. Jucker (ed.), *Historical Pragmatics: pragmatic developments in the history of English*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins. 393-437.
- 一. 2004. *Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis*. P & B ns. 132. Amsterdam: John Benjamins.
- 一. 2007. 'Interplay of (inter) subjectivity and social norm.' *Journal of Historical Pragmatics* 8 (2), 239-267.
- 劉怡伶. 2006. 「接続語「だから」の意味・用法—前件と後件に因果関係が認められる「だから」を中心に—」『日本語教育論集 世界の日本語教育』16, 125-137. 国際交流基金日本語国際センター.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. (3<sup>rd</sup> ed.) London: Oxford University Press.
- 武内道子. 2015. 『手続きの意味論 談話連結語の意味論と語用論』ひつじ研究叢書〈言語編〉第128巻. 東京: ひつじ書房.